

東京における幼児教育施設の設立過程

柴崎正行

(平成6年9月30日受理)

The Process of Institutional Establishment for Kindergartens in Tokyo

Masayuki SHIBASAKI

(Received September 30, 1994)

1. はじめに

わが国における近代の幼児教育の歴史が、明治初期を出発点にしていることはよく知られている。またその出発点のひとつが東京女子師範学校附属幼稚園であることもよく知られている。だがこの附属幼稚園があまりに知られすぎているために、わが国の幼稚園教育の施設がすべてこの幼稚園を模範にして造られたかのように思われている。例えばわが国の幼稚園の施設設備の歴史についてまとめている全国幼稚園施設協議会編『幼稚園の施設設備とその活用5、園舎の歴史と海外の園舎』では「最初の附属幼稚園は、当時としては全く新しい施設であったから、この擬洋風の幼稚園がモデルになって、しばらくの間おもな幼稚園はこの様式をまねた」と述べられている。(注1)

だが多田は、明治20年代の前半までに設立された幼児教育施設は様々な名称をもち、それぞれニュアンスが違っているが、それを分類すれば①東京女子師範学校附属幼稚園を模範とするもの、②託児所的性格をもったもの、③キリスト教主義の保育法を主体とするもの、という3つの類型に分けられるという。(注2)

本論ではわが国の近代的幼児教育施設の出発点でもありと言われている東京女子師範学校附属幼稚園の地元である東京における幼児教育施設の成立過程を検討することにより、幼児教育施設を規定してきた環境的要素について明らかにしていきたい。

2. 東京における幼児教育の成立過程

(1) 東京女子師範学校附属幼稚園の設立

児童学科幼児教育学研究室

東京女子師範学校附属幼稚園は本郷区湯島の地に明治9年11月14日に開設したが、開園当時から入園資格は男女を問わず満3歳以上6歳以下とし、また保育時間は毎日4時間を原則としていた。

保育科目として物品科、美麗科、知識科という3つの科目を置き、その中身には計数、博物理解、唱歌、説話、体操、遊戯も含まれていた。(注3)

物品科は主として日常生活において接する器具や花鳥等の物を幼児に見せてその名を教え、美麗科は幼児の好きそうな色彩や絵画を見せて美しい心を養い、知識科は恩物や計算、唱歌、説話等により知識を啓発するものであった。また明治14年には保育の要旨、保育科目及び課程表が改正され、説話が修身話、庶物の話に分かれ、読み方、書き方等が新たに加わった。

この附属幼稚園で規定された入園資格および保育時間、保育科目が、その後のわが国の幼稚園教育のモデルとなったことはいうまでもないが、幼稚園における保育のイメージを規定することにもなったのである。

(2) 東京における公立幼稚園の設立

明治15年4月「町村立私立学校幼稚園書籍館設置廃止規則」により幼稚園を設置するときは、区戸長、学務委員が協議し、区戸長はその経費の予算を区町村会に付し、議決を受けた後、学務委員・区戸長の連署をもって府知事の認可を受けることと定められた。

また明治15年12月に文部省は各府県の学務課長に対して簡易幼稚園の設置を奨励した。簡易な編成の幼稚園を新設し貧しい家庭の子供で両親がその養育を顧みない暇のない者を入れるように奨励した。その背景には26名に1名の割合で6歳未満の学齢未満児が小学校に入学してい

たという実情がある。さらに明治17年2月に文部省は学齡未満の幼児を学校に入れ学齡児童と同一の教育を受けさせるのは害があるので、幼児は幼稚園の方法に因って保育をすることという内容の通達を出した。

これらのことからわかるように、公立の幼稚園は幼児教育機関という性質とともに貧困家庭の幼児の保護という性質や学齡未満児の保護という性質ももっていたと思われる。

そこで創設期の公立幼稚園の保育内容について、代表的な以下の3園について、検討してみた。

① 江東小学校附属幼稚園

明治15年11月本所区公立江東小学校附属幼稚園の設立伺いが、区会の承認を得て府知事に提出され認可された。これが東京における最初の公立幼稚園であった。園児は満3歳以上6歳以下の男女児とし、場合によっては満2歳以上でも許可することとした。保育課程は明治14年に改正された東京女子師範学校附属幼稚園の保育科目を参考にしたらしく、科目としては修身話、庶物話、玩器用法、読み方、数へ方、書き方、図書、唱歌、遊戯、体操があり、どちらかという読み書きや玩具(恩物)の操作、遊戯や体操(徒手体操)といった座学的で動きの少ないものがほとんどであった。(注4)

だが東京女子師範学校附属幼稚園の保育内容に比べれば、小学校就学を意識した内容であるといえる。

② 麴町幼稚園

明治17年9月に麴町幼稚園設置伺いが麴町区学務委員から提出され、認可されて同年10月に開園した。この幼稚園は小学校とは別の敷地に独立した敷地と建物をもって設置された。保育科目は遊戯、修身話、庶物話、恩物、画方、数方、読方、書方、唱歌であり、やはり明治14年に改正された東京女子師範学校附属幼稚園の保育科目を模範にしていたことがわかる。(注5)

③ 誠之小学校附属幼稚園

明治20年6月に本郷区駒込西片十番地の誠之小学校内に誠之小学校附属幼稚舎が開設された。これは翌年に誠之小学校附属幼稚園と改称され、その後大正10年には文京区立第一幼稚園となる。設立当時の保育内容は、修身の話、庶物の話、遊戯、恩物、書き方、読み方、画き方、数え方など、やはり明治14年に改正された東京女子師範

学校附属幼稚園のものに準じていたという。(注6)

(3) 私立幼稚園の設立

① 桜井女学校附属幼稚園

明治9年に麴町区番町に桜井チカは桜井女学校を開設し、女子教育を開始したが、やがて東郷坂の手頃な家を借り受け、東京女子師範学校附属幼稚園保姆科第一回卒業生を雇い、東京で最初の私立幼稚園を開設した。明治13年のことであった。保育科目は物品科、美麗科、知識科及び五十音、計数、唱歌、単語図、読話、体操であり約25名の園児を一人の保姆が保育していた。(注7)

桜井チカの回想録によれば幼稚園保姆は馬屋原つるであった。だが明治13年桜井チカの事情により桜井女学校は米国長老教会婦人伝道局の配下に移り、中六番町に立派な校舎を建築した。明治16年幼稚園を拡張するために三番町に分校を開設し、米国よりミス・ミリケンを招いてその任にあたらせた。そして明治22年に桜井女学校は新栄女学校と合併して二番町に校舎を新築して女子学院を設立した。この附属幼稚園の保育科目は東京女子師範学校のものに基盤にしてはいたがキリスト教主義であったことから、修身話など儒教色の強いものは除いてあった。(注8)

② 共立幼稚園

明治16年に牛込区市谷薬王寺前町に共立幼稚園が設立された。また四谷区麴町に共立幼稚園第一分園が、また赤坂区氷川町に共立幼稚園第二分園が設置された(文部省年報より)。保育科目は東京女子師範学校附属幼稚園を参考にして物品科、美麗科、知識科を中心として、恩物のほか、唱歌、遊戯、説話、体操などからなっていた。(注9)

また教師は官立幼稚園保姆練習科卒業生を当てることとされていたことから、やはり東京女子師範学校附属幼稚園の強く受けていたといえる。

③ 芝麻布共立幼稚園

明治17年に芝公園内に芝麻布共立幼稚園が設置された。この園の園長兼保姆には東京女子師範学校附属幼稚園で保姆をしていた近藤浜が当たった。保育年限は3年で保育内容は明治14年に改正された東京女子師範学校のものに参考にして恩物を中心に、数へ方、読み方、書き方、唱歌、説話、体操、遊戯などが加えられていた。(注10)

④ 仏教系私立幼稚園

文京区小日向水道端の日輪寺内に明治19年に山田千代により小石川幼稚園が設けられた。山田千代は明治13年に東京女子師範学校の保姆科を卒業した。しかし小石川幼稚園は昭和20年に戦災で焼けていて、その実態はまだほとんどの部分が不明である。(注11)

3. 東京における明治初期の幼児教育施設の特徴

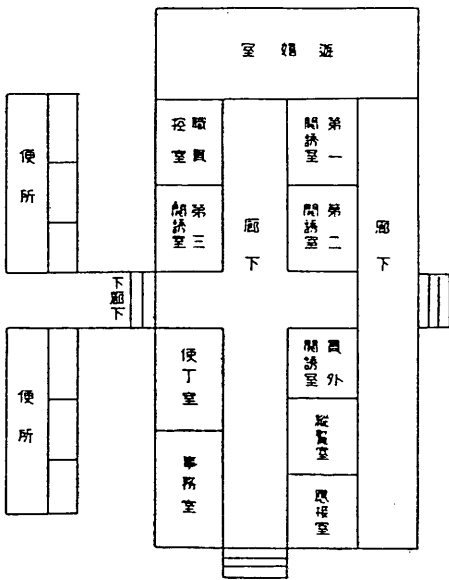
(1) 東京女子師範学校附属幼稚園の設立当時の施設設備について

わが国の幼稚園の歴史をはじめて著した倉橋によれば(注12)、この附属幼稚園の建物が何を参考にして作られたかは明確ではないという。だがこの附属幼稚園の設立に深く関与していた中村正直、関信三等が、文部省当局と相図って定めたのではないかとしている。その中村正直は附属幼稚園が開設された直後の11月18日の日日新聞に「ドウアイ氏幼稚園論の概旨」という雑報を載せている。倉橋によれば「これは彼の保育書『幼稚園記』の総

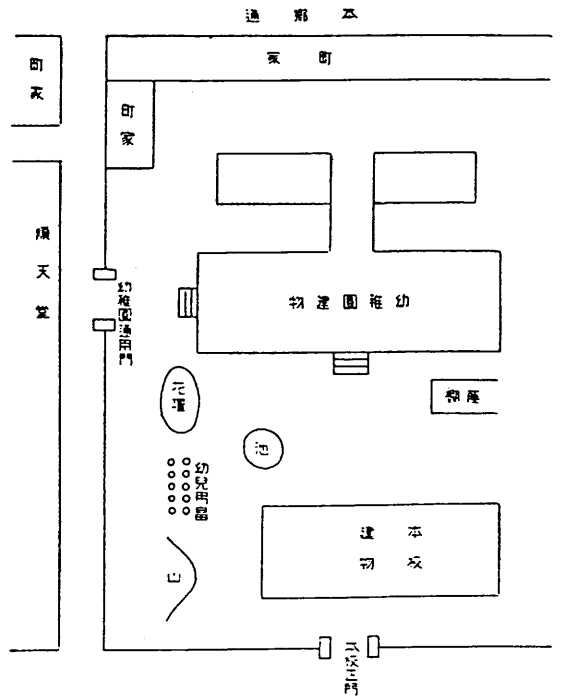
論ともいうべき部である」という。彼はそこで幼稚園を次のように紹介している。

「集会場の結構は、人為を喜楽せしめ、小児の性情に適することを旨とすべし、園に傍て一の大屋を起し、高尚にしてよく空気を疎通せしむべし、園には草を布き、花を栽え、また噴水を造らば、更に好し、美麗なる書画を備ふべし、室内に腰をかくべき座位を設け、又小児の為に矯登あるべし、又低き「テーブル」又体操及び遊戯奏走すべき場所、寛くあるべし。廣室には花を以て飾り書画其他心目を喜ばしむる物を備へ置くべし。種々の旗をも立つべし。」(注13)

いま設立当時の附属幼稚園の写真や配置図(図1)を見ると、園庭は通路以外は芝生であり、木がたくさん植えられており、その中に小山や池などの自然が造られ、さらには花壇や幼児用の畑もあり、噴水こそはなかったがまさに中村の述べた幼稚園の園庭のイメージそのものであった。(注14)



建 物 の 図



建 物 及 び 庭 園 の 図

図1 東京女子師範学校附属幼稚園(明治9年)

園舎は長方形の平屋で西洋造り（アメリカ式建築）であり、床が非常に高く造られていて、園庭には階段を降りて出るようになっていた。園舎は庭に面して手摺りのついた広い廊下があり、この廊下に沿って藤棚が作られていた。また現在の保育室である開誘室は机と椅子を小学校式に並べ、弁当棚、三角棚等を片隅に置いてあったという。員外開誘室は満2歳8ヶ月以上満3歳迄の幼児を保育した部屋であり、付添人も入っていて助手2名が保育したという。縦覧室は来賓者を通した部屋であり、ここには幼稚遊嬉の図、衣食住の図等が額にして飾られていた。また陳列棚があって幼児の製作品、動物の標本、その他諸種の玩具などを並べてあったという（注15）。そしてこの部屋は参観人のためだけでなく、幼児の鑑賞用とし、機嫌の悪い幼児を連れて行ったという（注16）。遊嬉室はやや広く作られていてピアノが置かれており、このピアノに合わせて遊戯をしたり体操が行われたという（注17）。また体操といってもごく簡単なものであり、みんなで手をつないで輪を作って上体を屈伸する程度のものであったという（注18）。

この園舎や設備の実際をみると、あきらかに中村正直が紹介している幼稚園の施設設備のイメージがかなり実現されていたといえるであろう。そこには必要な施設設備として、座して恩物を操作したり修身話などを聞いたりできる場（開誘室）、遊戯や体操のできるやや広い場（遊嬉室）、書画や珍しい品が陳列してある場、草花や樹木、水などの自然に触れられる場（園庭）という環境的要素が考えられており、附属幼稚園はそれらの要素をすべて満たしていたといえる。

また保育科目として示された3つの科目を実施する器具として物品科では幼稚園動物図50枚と幼稚園動物図解、美麗科では色紙や恩物、知識科では恩物、幼稚園修身の話、幼稚園唱歌集、幼稚園遊嬉などが用いられていた。

この附属幼稚園は明治17年9月の暴風雨により大損害を受け、明治19年に新築されたが、その構図をみると建物内の構造は変化し員外開誘室がなくなり開誘室が保育室、縦覧室が参考品室にそれぞれ名称が変わった以外は園庭も含めて全体としての要素はほとんど変化していなかったといえる。

(2) 公立幼稚園の設立当時の施設設備について

明治10年代に設立された都内の公立幼稚園のうち施設設備についての具体的な内容について記録の残されている

る2つの幼稚園を検討してみることに、公立幼稚園の施設設備の成立していく過程について見てみよう。

① 麹町幼稚園

明治17年に設立された麹町幼稚園は、保育科目は遊戯、修身話、庶物話、恩物、画方、数方、読方、書方、唱歌であり東京女子師範学校附属幼稚園を模範にしていたことがわかる。その設立当時の平面図をみると（図2）建物は2階建てであり、敷地は200坪で運動場があった（注19）。

これをみると園舎は付添人控所と開誘室、遊嬉室、応接室等からなっており、東京女子師範学校附属幼稚園のものと同様している。しかし園庭は運動場と記されてお

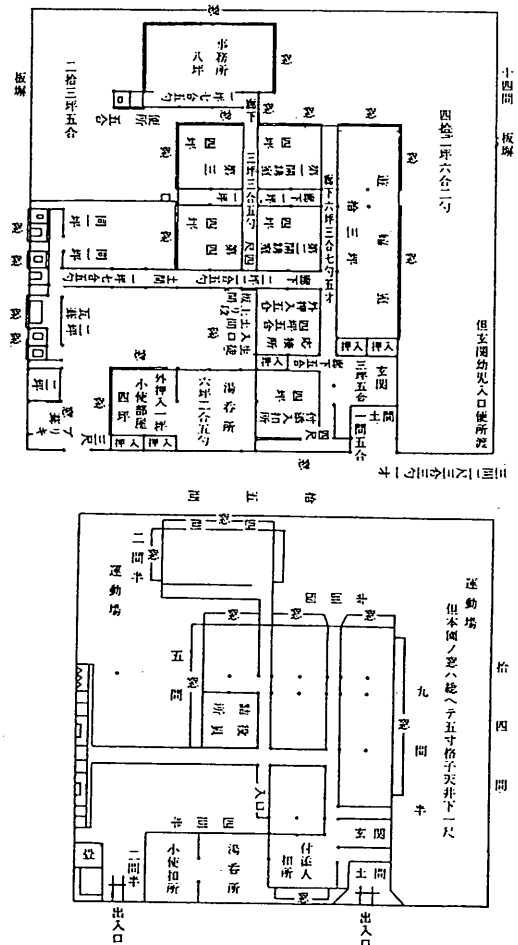


図2 麹町幼稚園（明治17年）

り、東京女子師範学校附属幼稚園のような小山や池、木々や花壇といった自然環境は考慮されていなかった。

開設当時の保育用器具をみると恩物の他は、幼稚園修身の話、日本庶物示教、幼稚園動物図50枚、幼稚園動物図解、幼稚園唱歌集、幼稚園遊嬉といった東京女子師範学校附属幼稚園でも使われていたものが備えられていたが、オルガンや標本などの陳列品はない。このことから3つの保育科目を教えるために必要な器具は購入したが、園庭などの整備は全く考慮されていなかったことがわかる。またこの麹町幼稚園は明治20年には麹町小学校附属幼稚園となり、明治32年には麹町小学校の敷地内に新築され、開講室が3室と恩物陳列室、保姆室、付添人控室などが設けられたという。(注20)しかしやはり園庭等の整備は考慮されていない。

② 誠之小学校附属幼稚園

この幼稚園は明治20年6月に誠之小学校の一室を使用して幼稚室として開設されたが、翌明治21年6月に敷地350坪を阿部家から借り上げ、誠之小学校を増築して附属幼稚園とした(図3の点線の部分)。(注21)(注22)ここでは幼稚園開講室と遊戯室、幼児付添人室があるだけで、園庭については何も記されていない。だが明治23

年当時の誠之小学校附属幼稚園の卒業写真をみると園舎の前に藤棚のようなものが写っているの、ある程度は樹木が植えられていた可能性がある。また明治27年頃の遊戯室にはオルガンがあったと思い出に記されている(注23)。また設立当時の保育器具としては幼稚園修身の話、日本庶物示教、幼稚園動物図50枚、幼稚園動物図解、恩物、幼稚園唱歌集、幼稚園遊嬉など、東京女子師範学校附属幼稚園と同じものが備えられていた。

明治30年小学校の校舎が手狭になったために幼稚園は阿部家より308坪の土地を借用して新築された。その園舎平面図を図4に示した(注24)(注25)。それを見ると、遊戯室が大きくなり、開講室が保育室という名称になり、保姆室のほか付添人用の控室が設けてあった。この園舎の構造はその当時の東京女子師範学校附属幼稚園のそれと類似していることがわかる。当時の思い出の記録から、遊戯室にオルガンがあり遊戯をしたことや亜鈴などを用いて体操をしたこと、また園庭には藤棚が造られていたことなどがわかる。(注26)

昭和8年に全面改築が行われ、図5に示したように鉄筋コンクリート木造二階建となった。保育室の数が増え遊戯室が20坪から50坪に広がり、控室が待合室に、保姆室が園長室や更衣室、材料室などに変わり、また図書室

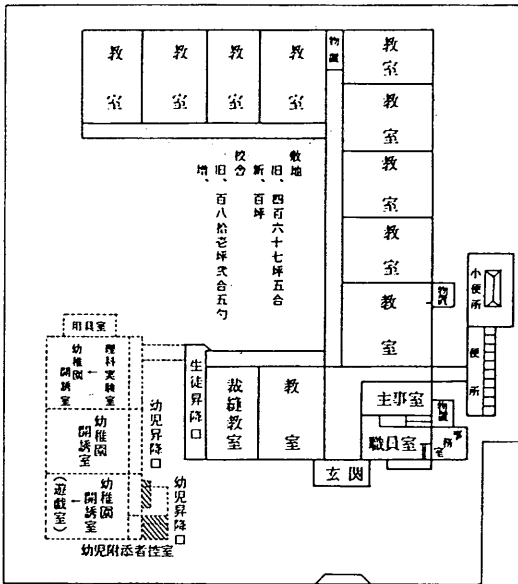


図3・誠之小学校附属幼稚園(明治21年)

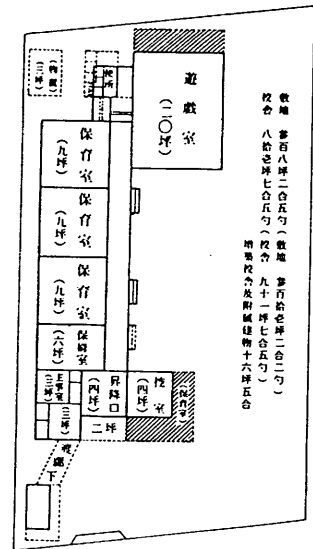


図4 誠之小学校附属幼稚園(明治30年)

ができたり園庭に砂場ができています。こうした園舎の構造は現在の園舎とほぼ同一のものであるといえる。

このように2園の園舎および施設設備の変遷をみると、東京女子師範学校附属幼稚園の施設設備の要素として考えられていた、恩物を操作したり修身話などを聞

の敷地及建物の概略が記載されている。それによれば敷地は三十五坪であり、建物は木造二階建てであった。そこでの実際の保育の様子は回想録から次のようであった。

「明治23年頃、今の女子学院の裏の元の土肥さんの屋敷の処に、幼稚園と小学校がありました。渡瀬氏一家はそこに住居されて居られて鶏を沢山飼育して居られました。(注27)」

「当時学校は東郷坂の中途にあった旗本屋敷をそのまま校舎に用いて畳の上に机や腰掛けが置いてあり床の間が黒板や地図をかけるところとなっていました。門をはいって右側に二階建て七間ばかりの一棟の家があって、下には桜井先生御夫妻に、昭憲氏のお母さんが住んでおられました。二階には私たち四五人の塾生が居りましたし、校舎の方にも…たちが、おもとさんと言った方の監督の下に寄宿して居られました。…学校に附属の幼稚園もありました。唱歌は「風車」「家鳩」などと言うのを歌っておりました。これが日本における最初の私立幼稚園であったのです。(注28)」

「その頃の学校は運動場とて無く、ただ芝生の庭があって小さな築山や花壇がいくつとはなく並べられていて、そこに四季折々の花咲き揃って美しい眺めを展開するのですが、私共お転婆盛りの子供のためには跳ね廻る場所もなければブランコすら無かったので物足りなさ限りなく、雨天の日などは畳の敷いてあった二十畳位の部屋で自分たちの帯びを縄にして縄飛をしたり、その帯びの上を綱渡りして遊んだものでございます。(注29)」

この回想録から、幼稚園は屋敷を改装した学校の一部が当てられていたことがわかる。屋敷の庭は芝生や築山や花壇があり、四季折々の自然に触れることができた。また20丈という広い部屋(遊戯室)があり、そこで自由に遊ぶことができた。具体的な設備については不明であるが、こうした記載から桜井女学校の附属幼稚園は東京女子師範学校附属幼稚園ほどではないにしても、当時の公立幼稚園よりも園庭を活用した保育を展開していたことが想像される。

② 共立幼稚園

赤坂に設立された共立幼稚園第二分園の開業願をみると、保育科目および内容は東京女子師範学校附属幼稚園のそれとほとんど同様のものであった。恩物を中心にして、唱歌や遊戯、説話や体操などを行っていたようである。保育玩具の項目には恩物のほかに、適宜の玩具をもつ

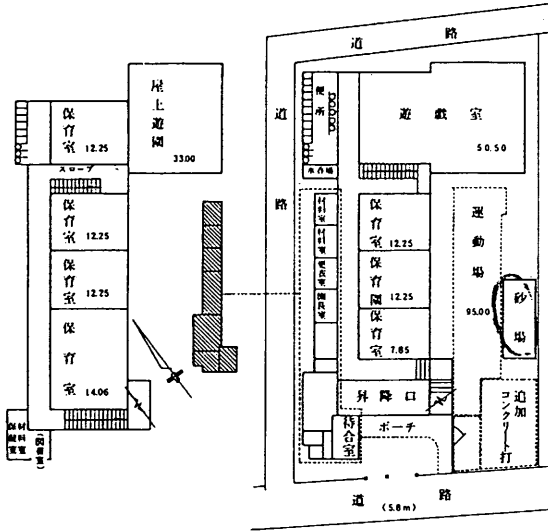


図5 第一幼稚園(昭和8年)
(大正10年に誠之小学校附属幼稚園を改称)

ける場としての開誘室(保育室)と遊戯や体操などのできる場としての遊嬉室(遊戯室)とは設置されていたけれども、陳列品を展示する場や自然の豊かな園庭などは設置されていなかったことがわかる。これらのうち園庭が楽しく自然に触れられるように造られていくのは、大正時代以降になった。

(3) 私立幼稚園の設立当時の施設設備について

① 桜井女学校幼稚園の施設設備について

東京府に提出された書類によれば、入園児は満3歳以上6歳未満の男女児とし、満2歳以上も入園させることがあったという。保育時間は4時間としていた。保育科目は物品科、美麗科、知識科の3科であり、「観玩ニ由テ知識ヲ開ク則チ立方体ハ幾個ノ端線平面幾個ノ角ヨリ成リ其形ハ如何ナル等ヲ示ス」とされ、五十音、計数、唱歌、単語図、説話、体操などが行われた。

明治16年に東京府に出された開申書には、この幼稚園

てこれに充てると書かれていることから、幼児にも読み書き算数を教えようという傾向に向かっていた当時の幼稚園において、どちらかという幼児の操作性を重視しており、それほど読み書きを重視していなかったようである。

③ 芝麻布共立幼稚園

この園の園長兼保母には東京女子師範学校附属幼稚園で保母をしていた近藤浜が当たった。保育年限は3年で保育内容は東京女子師範学校のを参考にして恩物を中心に、数へ方、読み方、書き方、唱歌、説話、体操、遊嬉などが加えられていた。

保育用具は恩物、恩物机の他、幼稚園修身の話、日本庶物示教、幼稚園動物図、幼稚園動物図解などがあり、やはり東京女子師範学校附属幼稚園の設備と類似したものであった。またその目的のところに「…などを得させた後に、小学校に入る…」と書かれており、桜井女学校附属幼稚園や共立幼稚園などに比べると、小学校に向けての指導を意識的に重視していたといえよう。

4. 考察とまとめ

これまでわが国の幼児教育施設の設立過程は、東京女子師範学校附属幼稚園がモデルになって、その施設設備が全国的に普及していったように考えられてきたが、必ずしもそうとはいえないことが、当時の東京府下での幼児教育施設の設立過程をみるといえると思う。

たしかに今回調査した公立私立の幼稚園はいずれも、その保育科目や保育内容では東京女子師範学校附属幼稚園の影響を強く受けていた。またそのために実際の保育で用いる教材や教具も、ほとんどが東京女子師範学校附属幼稚園で使われているものをそのまま同じようにして使用していることがわかった。それが例えば教具では恩物であり、教材では「幼稚園修身の話」「日本庶物示教」「幼稚園動物図」「幼稚園動物図解」「幼稚園唱歌集」などであった。

こうした保育内容の共通性はあったにしろ、次のようないくつかの観点からみると、そこには違いがみられることがわかった。

まず第1に、幼稚園の建物が設置された経緯が違っており、それが保育内容にも微妙な影響を及ぼしていることである。東京女子師範学校附属幼稚園ははじめから独立した園舎をもっていたが、すべての幼稚園がそのよう

に恵まれた条件で設立されたわけではない。今回の調査した幼稚園で最初から独立した園舎をもっていたと考えられるのは、麹町幼稚園と共立幼稚園、芝麻布共立幼稚園であり、他は小学校や女学校に併設される形で設立されている。

麹町幼稚園は開園してまもない明治20年に麹町小学校が開校すると同時に、この小学校の校舎の一部に付設される形で移転し同小学校附属幼稚園となった。したがって実質的には付設であったと考えられる。共立幼稚園はまだ私立幼稚園がなかった当時においてかなりの人気を呼んだらしく希望者が多かったので資金的にも余裕があり、独立した園舎をもつ分園を次々と設立できたのであろう。また芝麻布共立幼稚園は設立出願人に当時の社会的な実力者が名を連ねていることから、寄付等による資金的援助があったのであろう。こうしたことから独立した園舎を持っていたのは、資金的に恵まれていた私立幼稚園に限られていたといえることができる。

公立幼稚園は小学校に付設されるという形で設立が可能になったし、桜井女学校附属幼稚園は女学校に付設されて設立された。これはまだ学校の設立が資金的にも非常に困難な時代であったからである。したがってこの独立した園舎がどのような内容なのか比較したかったが、残念ながら今回はこの2つの私立幼稚園の施設設備の内容がいまひとつ明確にならなかったため、その点は今後の調査に課題として残しておく。

第2に、園庭をどのように設置し、どのように活用していたかということである。当時の保育内容がほとんど保育室での静的な活動が中心であり、時折遊戯や体操などの動的な活動を入れる程度であった。したがっていくら当時とはいえ、活動性の高い幼児にとっては苦痛であつたろう。こんな時に、園庭に出て伸び伸びと体を動かす活動ができることは、どれほど楽しいものであつたろう。それには園庭に出る機会と、出て遊べる場や空間がなければならない。今回の調査で園庭に芝生や木や山がある幼稚園は、桜井女学校附属幼稚園と誠之小学校附属幼稚園くらいであった。あとの園は保育室や遊戯室の中での活動がほとんどであったと考えられる。まだ幼稚園は小学校で生徒が勉強するように、幼児が勉強する場という認識が強かったのであろう。そのために、園庭も活動の場という考えがなかったのであろう。また幼児も狭くて設備も何もない園庭で、地域での遊びを取り入れて気分転換をはかっていたのかも知れない。だが今回の調査で

はそこまではわからなかった。

以上のことから、明治20年当時における東京における幼児教育施設としての幼稚園には、その性格として4つのものがあつたと考えられる。

1つは、モデル施設としての性格を有する幼稚園であり、これが東京女子師範学校附属幼稚園である。

2つは、経済的に恵まれた階層の幼児が小学校の準備として通つた幼稚園であり、これが共立幼稚園や芝罘布共立幼稚園であつた。ここは園舎や設備も恵まれていたと考えられる。

3つは、キリスト教の考えにもとづいて設立された幼稚園であり、伝統的なフレーベルの考えを实践しようとしてオルガンや園庭もあり、これが桜井女学校附属幼稚園であつた。

4つは、就学前の幼児が小学校に混在するのを防ぐとともに、幼児に就学前教育をする場を与えようとしたものであり、これが公立幼稚園であつた。そこでは小学校に付設した保育室と遊戯室で、幼児に教えることを中心にした保育を実施していた。

多田は幼児教育施設を3つの類型によって分けたが、幼稚園だけでもこのように4つに分けられることから、今後は保育所などにもこうした調査を広げるとともに、時代が経るにつれてこうした性格がどのように変化していくのかも検討してみたい。またこうした性格の変化によって、それぞれの幼稚園における環境的要素も当然のことながら異なってくると考えられるので、その点も検討したい課題である。

引用文献

- 注1 全国幼稚園施設協議会「幼稚園の施設設備とその活用5 園舎の歴史と海外の園舎」昭和46年、P5
- 注2 多田鉄雄「創設期の幼児教育施設の性格と保育内容」『幼児教育100年の展望』昭和51年、ひかりのくに、P16-17
- 注3 倉橋惣三、新庄よしこ著「日本幼稚園史」P68-71
- 注4 墨田区教育委員会編、「墨田区教育史」昭和61年 P130-133
- 注5 東京都立研究所編「東京教育史資料体系、第六巻」昭和48年、P457-464
- 注6 文京区立第一幼稚園、「百年の歩み」昭和62年 P32-33
- 注7 都立教育研究所編「東京教育史資料体系、第四巻」昭和47年 P593-594
- 注8 女子学院「女子学院八十年史」昭和26年 P40-47
- 注9 港区教育委員会編「港区教育史 上巻」昭和62年 P225-226
- 注10 同上 P226-230
- 注11 文京区教育委員会編「文京区教育史」昭和58年 P335
- 注12 倉橋惣三・新庄よしこ『日本幼稚園史』P55-64
- 注13 同上 P45-46
- 注14 同上 P55-56
- 注15 同上 P59
- 注16 同上 P63
- 注17 同上 P236
- 注18 同上 P274
- 注19 東京都立教育研究所編「東京教育史資料体系、第六巻、」昭和48年
- 注20 千代田区教育委員会「千代田区教育百年史」昭和55年、P505
- 注21 文京区教育委員会「文京区教育史」昭和58年、P328
- 注22 文京区立第一幼稚園「百年の歩み」昭和62年、P32
- 注23 文京区教育委員会「文京区教育史」昭和58年、P328
- 注24 同上 P329
- 注25 文京区立第一幼稚園「百年の歩み」昭和62年、P33
- 注26 文京区教育委員会「文京区教育史」昭和58年、P330